
ガキと娘と阪本さん

ゴードン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ガキと娘と阪本さん

【Nコード】

N7018Y

【作者名】

ゴードン

【あらすじ】

今日のはかせが発明した、阪本さんの首輪の修理の日である。だがはかせはその首輪に変な機能を付けていて……。

〈非日常の始まり〉（前書き）

新連載は日常の二次作品です！

原作は知りませんがアニメの知識と気合で頑張ります！

主人公が阪本さんのストーリーリ―始まります！

〈非日常の始まり〉

この物語の主人公は猫である。その猫は路上で生きようと決めていたが、ある日人間の女の子に拾われた。

彼を（猫）拾った人間は、はかせと呼ばれている子だ。彼は「ガキ」と呼んでいる。その猫ははかせに「阪本」という名前を付けられて迷惑している。

「（そもそも段ボールに書いてあったって理由でこんな名前を付けるヤツがいるか？ いや、いない。……と思いたい）」

そう心の中で呟く阪本。

「あつ、阪本さん。じつとして下さいね」

そう言っただけの首輪を外すのは、この東雲研究所で作られたらしいロボット娘の東雲なの。

この首輪があることによって阪本さんは人の言葉が話せる。今日はこの首輪のメンテナンスの日だ。コレが外された今、阪本さんはしばらく話すことができなくなる。

「ちょっと待っていてください。阪本さん」

そう言っただけの首輪を渡す相手はこれを作った本人のはかせ。

こんなものを開発する素晴らしい頭脳を持っているが、実年齢は8歳らしい。

はかせは首輪を受け取るとすぐに何か作業を始めた。

「阪本、出来たよー！」

阪本さんは適等に時間を潰していると、どうやらメンテナンスが終わったらしく首輪を持ってはかせがやってくる。その顔は妙にソワソワしている。

「実はねー、はかせが阪本の為に新機能をつけたんだけど！」

「どんな機能何ですか？」

娘がガキに尋ねる。

「今回のも凄いいんだけど！ 実はね……」

そのとき阪本さんの体が光りだして何かが起こった。このとき彼は後悔した、事前にどんなものか聞いてから付ければよかったと……。

「人間になれるんですっ！」

光が止んでから阪本さんは鏡を見ると、真っ黒の長めの髪の毛の男が立っていた。

……何故か全裸で……。

「ハアアアアアッ!？」

阪本さんが人間になったのがこの物語の始まりだった。

《非日常の人物》（前書き）

阪本さんの人間としての人物紹介です。 日常を知らない人にもわかるように書いたつもりです。

ちなみに東雲なのはまだ時定高校に通っていません。

《非日常の人物》

《阪本さん》

【概要】

東雲研究所で飼われている黒猫。道端にいたのをはかせが拾った。名前の由来は拾われた時に「阪本製薬」の箱に入っていたため、はかせが名付けた。

1人称は「俺」で、はかせを「ガキ」、なのを「娘」と呼ぶ。

はかせの発明した首輪スカーフで人語を話すことができたのだが……？

【人間としての概要】

首輪のメンテナンスの日にはかせが無駄な機能を付けてくれやがったせいで人間になってしまった。首輪を外しても人間の姿のままだが、言語能力がなくなる（それなんて羞恥プレイ？）。

姿は「とある魔術のインデックス」の「上条当麻」のような感じ（黒髪黒眼の男ってこの人ぐらいしか知らない）。

服ははかせが用意していたYシャツと学ランにジーパンを穿いている。ちなみに姿は16〜18歳に見えるが、精神年齢は20歳以上。元が猫なので犬や風呂が苦手。中村先生はトラウマ。身体能力や記憶能力は常人の比ではない（それでも、ロボットのなのには及ばない）。

《東雲なの》

【概要】

東雲研究所のはかせによって開発された人間型ロボットで、ロボットとしての年齢は1歳。はかせのお手伝いをしながら日々過ごしている。

普通の人間生活を送りたいと思っている。

背中後ろにある大きなネジ回しが本人にとってコンプレックスとなっており（走り高跳びでベリーロールしかできなかったりするので）、はかせに外してほしいと要求しているが、はかせは外すつもりはないらしい。はかせ曰く、なの以外なら外すことはできる。T O R E T A ! !

はかせの気まぐれにより、意味のないような機能がふんだんに搭載されている。

【機能】

足の小指が取れたり、右手が取れて、新たな腕が出てきたり（ロケツトパンチ）、左手が取れて、ちくわが出てきたり、ロールケーキや甘食が格納されていたり、デジタル時計を腕に内蔵（唯一、本人の意志で利用している機能）していたりする。

他にもたくさん機能がある。

《はかせ》

「 だけど」や「 かもしれない」が口癖の天才少女。年齢は8歳。好きな食べ物はオムライス、嫌いな食べ物はネギ。好きな生き物はサメ。

彼女の東雲研究所には他にも東雲なのと阪本がいる。

なののねじは意地でも取らない。

この小説では時定高校の校長（東雲校長）の孫という設定でいきます。

〈非日常の人物〉（後書き）

こんな所ですかね……。

恐らく時定高校のキャラが出てくるのはずいぶん後かと。

〈非日常の1話〉

~~~~~前回までのあらすじイイイイ~~~~~

はかせが首輪につけた怪しい機能のせいで阪本さんが人間になっ  
てしまった!?

『ドムロトー!』

~~~~~あらすじイイイイ終了~~~~~

「さ、阪本さん！ とりあえず服着てください！」

「ノオオオオツッ！！ おいガキ！ なんか服ないのかア！」

「ふっふっふ、何とここに阪本用の服があるのですっ！」

そういうことは先に言ってお下さい。

阪本さん着替え&はかせに拳骨

「……………痛い……………」

そうやって阪本さんに殴られた頭を涙目ですりすりと擦る少女。
まさしくこの事態を引き出しやがった張本人のはかせだ。

「さ〜て？ どういうことか説明してもらおうか、ガキ」

はかせに机を挟んで正面からあぐらを掻いて向き合うのは、一番

の被害者であろう阪本さん。怒ってるのが伝わるくらいに額に青筋を浮かべている。

「えつとね……、阪本は家族だけどね……、私たちと違うじゃん……、でね……、阪本もね……、人間にしちゃえばいいじゃんってね……？」

そんなことをはかせがぶつぶつ言ってる間になのと阪本さんは緊急家族会議を開いていた。

『どうしましよう阪本さん！ 私、感動したらいいんでしょうか！？ あきれたらいいんでしょうか！？（ヒソヒソ）』

『うちの子はこんなに優しく育ちました、ってか！？ 冗談じゃねえ！ ちよつといい話でまとめられて人体改造（猫体改造？）されてたまるか！（ヒソヒソ）』

『でも、はかせはこんなに優しい子に！ こんなに優しいんですよ！？（ヒソヒソ）』

『そんな理由で体を改造される方の身になってくれ！（ヒソヒソ）』

二人は色々な意味でパニックに陥っていた。

「阪本……。どうかな……。？」

はかせが涙声で呟くように言う。

阪本さんは固まってしまった。そりゃあそうだ。天才といってもまだ子供、そんな子の悪意のない視線を向けられたら動けないだろう。

『どつすりゃいいんだ！ もう殺せ！ いっそ殺してくれッ！（ヒ

ソヒソ)』

『だ、大丈夫です阪本さん！ きっとはかせですから元に戻せますよ！(ヒソヒソ)』

『そ、そうか！ ナイスプレイだ娘！(ヒソヒソ)』

もう一度、阪本さんははかせに向き合う。

「まあ、なっちまったもんはしょうがねえ。でだ、ガキ。これは元に戻すことはできるのか？」

さつきとは違い、いつもの落ち着いた様子ではかせに問いかける。そう言われるとはかせは口をもごもごやって明らかに動揺した様子を見せる。

「……言っても怒らない……？」

「おっ」

はかせの問いに阪本さんは答える。

「……拳骨もしない……？」

「はい」

なのも単調に答える。

「……あのね」

説明中

はかせが言うにはこうだ。まずスカーフに脳に特殊な電流を送る機械を付けていて、その電流により細胞や肉体の構造を芯から変え

てしまう。だがその電流がないと言語機能が無くなる。

明らかにありえないのだが、はかせなら出来そうに困る。

「で、戻ることにはできるんですか？」

「たぶん無理だと思う。体の成長は出来ても、成長の逆流はダメだったから……」

「つまり、出来ないってワケか？」

「うん……。ごめんね阪本……」

はかせが申し訳なさそうに俯く。今回は自分の勝手な行動を反省してるみたいだ。

阪本さんはあきれたように「はあー……」と溜息を吐く。

「しかたねえな……。お前の勝手な行動には慣れっこだしな。それに、人間になってみたいって思いもすこしはあったしな」

「ですよネツ！ 全人類の希望ですよネ！」

「いや……。お前ほど深くは願っていないが……」

阪本さんの発言に、なのが全力で頷く。

「じゃあ、許してくれるの……？」

「おう」

阪本さんがはかせの頭をワシヤワシヤと撫でる。ちなみに阪本さんの身長は、はかせよりもなのよりも高い。

「ホントにホントに！？ わーい！ 阪本が許してくれた！」

「よかったですね、はかせ」

「うんっ!」

その時、なのが阪本さんに何か目で合図を送ってきた。阪本はいつものように散歩に出かける。

『でも、今日はお菓子無しです!』

『えー! 阪本は許してくれたよー!?!』

『はかせが悪さしたバツです!』

『うわーん! なののバーカ!』

そんな声が研究所の中から聞こえる。

「うるせえなあ……」

そう言いながらも阪本さんのその口はかすかに笑っていた。

そして阪本さんはその口で何かを呟いた。風に掻き消されてしまったが恐らくこう言ったんだろう。

「ああ、これが俺の日常なんだ」

〈非日常の1話〉（後書き）

第一話どうでしたか？ 感想待ってます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7018y/>

ガキと娘と阪本さん

2011年11月21日23時47分発行